第１２回川崎病全国調査成績

（分担研究：川崎病のサーベイランスに関する研究）

柳川　洋、中村好一、屋代真弓
川崎富作*、大川澄男**、加藤裕久***

要約：厚生省川崎病研究班は、１９７０年以来ほぼ２年に１回の間隔で１９９２年末までに、１２回にわたって全国の医療機関を受診した川崎病患者を対象に疫学調査を実施し、これまでに１１６，８４８名（男６７，８１５人、女４９，０３３人、男女比１．４）の患者が報告された。今回１９９１年１月～１９９２年１２月末までの２年間における第１２回全国調査の解析が終了し、患者数、性年齢分布、同胞例、再発例、心後遺症例、治療状況等の疫学特性を明らかにしたのでその概要を報告する。

見出し語：川崎病、全国調査、疫学

【目的】　厚生省川崎病研究班は、最近のわが国における川崎病の疫学特性および治療状況を明らかにする目的で、全国の医療機関の協力を得て第１２回全国調査を実施した。

【方法】　第１２回川崎病全国調査は、１９９１年１月１日より１９９２年１２月３１日の２年間に小児科を併設する１００床以上の病院、および小児科のみを標榜する１００床未満の専門病院を受診した川崎病初診患者を対象にした。調査を依頼した施設のリストは、厚生省健康政策局総務課編「病院要覧１９９２年版」（医学書院発行）によって作成した。対象施設数は２，６５２カ所であり、これらの施設に調査票（連名簿形式）および川崎病診断の手引き（１９８４年９月改訂第４版）を郵送した。

【結果】　**１．回収率**

調査依頼施設２，６５２カ所のうち、１，８２６施設から回答が得られ、回収率は６８．９％であった。そのうち、患者報告があった施設は１，０８６施設（回収施設の５９．５％）であった。都道府県別回収率の最も高いところは三重県９３．３％、最も低いところは沖縄県の５０．０％であった。

２．患者報告数

今回の調査で報告された１９９１年、９２年の患者数は１１，２２１人（男６，６０４人、女４，６１７人）で、２年間平均の罹患率は両年の推計値による０－４歳人口１０万対９０．０（男１０３．３、女７６．１）であった。患者数の性比は１．４３、罹患率の性比は１．３６で男が多かった。年齢別にみると２歳までのものが全体の７０．１％（男７１．７％、女６７．９％）を占めていた。２年間の都道府県別患者報告数は、東京１，０９２人、次いで神奈川７１４人、大阪６７０人、千葉５８７人の順であった。２年間の月別、性別患者報告数を図１に示す。男女とも冬（１２月、１月）および夏（１９９１年は６月、９２年は７月）にやや増加し、秋（９月、１０月、１１月）は少なめであった。またすべての月で男が多かった。

３．罹患率

１９９１年、９２年の性別、年齢別罹患率は、男女とも０歳後半にピークを示す一峰性のカーブを示していた。罹患率の性比は、月齢が１２～１４カ月の者で最も大きく、１９９１年１．７７、９２年１．６３であった。（図２）

自治医科大学公衆衛生　:Department of Public Health, Jichi Medical School
*日本川崎病研究センター:Japan Kawasaki Disease Research Center
**日赤医療センター小児科:Department of Pediatrics, Japan Red Cross Medical Center
***久留米大学医学部小児科:Department of Pediatrics and Child Health, Kurume University School of Medicine

4．診断

診断基準への一致度をみると、定型例８６．５％（男８６．９％、女８６．０％）、不定型例３．７％（男３．８％、女３．６％）、容疑例９．８％（男９．３％、女１０．５％）であった。今回新たに調査項目に加えた不定型例について、性年齢別にみると、男女とも１歳までの若年児と、５歳以上の高年児に多くみられた。

5．同胞例

同胞例ありの割合は１．０％（男１．０％、女１．１％）であり、５歳以上の年齢で急上昇し、女の５歳の患者では男の２倍近くになっていた。

6．再発例

再発例の割合は３．０％（男３．２％、女２．７％）であった。性比について比較すると男女とも年齢とともに上昇し、特に５歳の女が高かった。再発回数別にみると、再発１回目の者は報告患者中２．６％、再発２回目以上の者は０．２％であった。再発１回目の者の割合は年齢とともに上昇していた。２回目以上の者の割合は３歳以上で増加していた。これは、１回目の再発から２回目再発するまでに少し期間があるためと考えられる。ガンマグロブリンの使用の有無別の再発例の割合をみると、両方とも同じ年齢傾向を示し、再発、初発にかかわらずほぼ同じ割合でガンマグロブリンが使用されていた。初発から再発までの期間をみると、男は３～５ケ月に集中する傾向がみられ、女の約２倍であった。一方女は初発後０～３カ月から９～１１カ月にかけて男より広い分布を示していた。

7．死亡例

死亡例は２年間に９例（男７例、女２例）報告され０．０８％を占めていた。性別にみると、男が高率であり、年齢別にみると、１歳未満が０．１２％で１歳以上に比べて約２倍の高率を示した。（表１）

8．心後遺症例

心後遺症例の割合は１３．１％（男１５．０％、女１０．５％）であり、男は女の１．５倍の高率を示していた。心後遺症ありの割合を性年齢別にみると、男女とも６カ月未満の若年児と９歳以上の高年児が最も高く、２歳から６歳にかけて低いＵ型のカーブを示す傾向がみられた。各年齢とも女は男に比べて低かった。（図３）

心後遺症の種類別の割合は報告患者中、冠状動脈の瘤・拡大１１．７％、巨大瘤１．１％、弁膜病変０．５％、狭窄０．３％、心筋梗塞０．２％であった。男女別にみるといずれも男に高く、特に巨大瘤では、男は女の２倍以上の出現率であった。いずれの病変も年齢による差は殆どみられなかったが、瘤・拡大の出現率は２歳未満の若年児にやや高率にみられた。（図４，５）

9．初診時分布

患者の初診日は第４病日が最も多く、第４病日までに受診した者は２歳未満の者では５７．４％を占めていた。２歳以上の者では４８．５％であり、２歳未満の若年児が早く受診していた。患者の初診日について、診断別にみると、定型例は第４病日にピークを示していたが、不定型例、容疑例は第３病日にピークがあり、受診病日がやや早い傾向がみられる一方、１０日以上たってから受診するものも多くみられた。

１０．治療

ガンマグロブリンの使用の有無別の心後遺症例の割合をみると、使用ありは使用なしに比べて、６カ月未満および６歳以上で高率の傾向を示していたが、他の年齢層で大きな差はみられなかった。２年間でガンマグロブリンの治療を受けたものは７９．８％（男８０．２％、女７９．３％）を占めていた。ガンマグロブリンの使用の割合を性、年齢別にみると、男女とも４歳代までは約８０％を占め、その後下降していた。

ガンマグロブリンの１日あたりの投与量は200mg/kgの者が最も多く、次いで400mg/kg、300mg/kgの順となっていた。投与期間は５日が最も多く、次いで３日、４日の順であった。１日あたり投与量別に投与期間をみると500mg/kg以下では５日間が最も多く、1000mg/kg以上では１日投与が大部分を占めていた。ガンマグロブリンの１日投与量と使用日数から計算した使用総量は1000mg/kgまでが最も多く、次いで1001～1500mg/kg、1501～2000mg/kgの順であった。男および２歳未満の者の使用総量がやや多かった。（図６）

ガンマグロブリンの投与開始日は第５病日が最も多く、次いで第６病日、第４病日の順となっていた。男がややはやく投与する傾向がみられ、第５病日までに投与を開始した者は男では５５．４％、女では５１．９％であり、その割合を年齢別にみると、２歳未満では５９．２％、２歳以上では４７．５％と１０％以上の開きがあった。診断別にみると、定型例がややはやく投与を開始し、不定型例、容疑例は１０日以上たってから投与開始するものも多くみられ、これは初診時病日の分布と類似していた。（図７，８）

ガンマグロブリンの種類別使用頻度の分布をみると、完全分子型（スルホ化）が全体の８２．９％を占めていた。次いで、完全分子型（その他）、酵素処理群の順であった。商品名でみると、ベニロン、ヴェノグロブリンＩの両者あわせて９５％を占めていた。

【考察とまとめ】　２年間の報告患者数は１１，２２１名であり、月別患者数は男女とも冬および夏にやや増加し、秋は少なめであった。性、年齢別罹患率は男女とも０歳後半にピークを示す一峰性のカーブであった。診断基準への一致度をみると、定型例８６．５％、不定型例３．７％、容疑例９．８％であった。報告患者中同胞例、再発例、心後遺症例の出現頻度は、それぞれ１．０％、３．０％、１３．１％であった。初発から再発までの期間は３～５カ月が最も多く、２回以上の再発例は０．２％みられた。死亡例は２年間に９人（男７人、女２人）報告され、０．０８％を占めていた。心後遺症の内容では、冠状動脈の瘤・拡大１１．７％、巨大瘤１．１％、弁膜病変０．５％、狭窄０．３％、心筋梗塞０．２％であり、いずれも男に高率にみられた。患者の初診日は第４病日が最も多く、２歳未満の若年児がやや早く受診していた。ガンマグロブリンの治療を受けた者は７９．８％を占め、投与開始病日は第５病日が最も多く、１日あたり投与量は200mg／kgおよび400mg／kgの者が最も多かった。

図1　月別、性別患者報告数

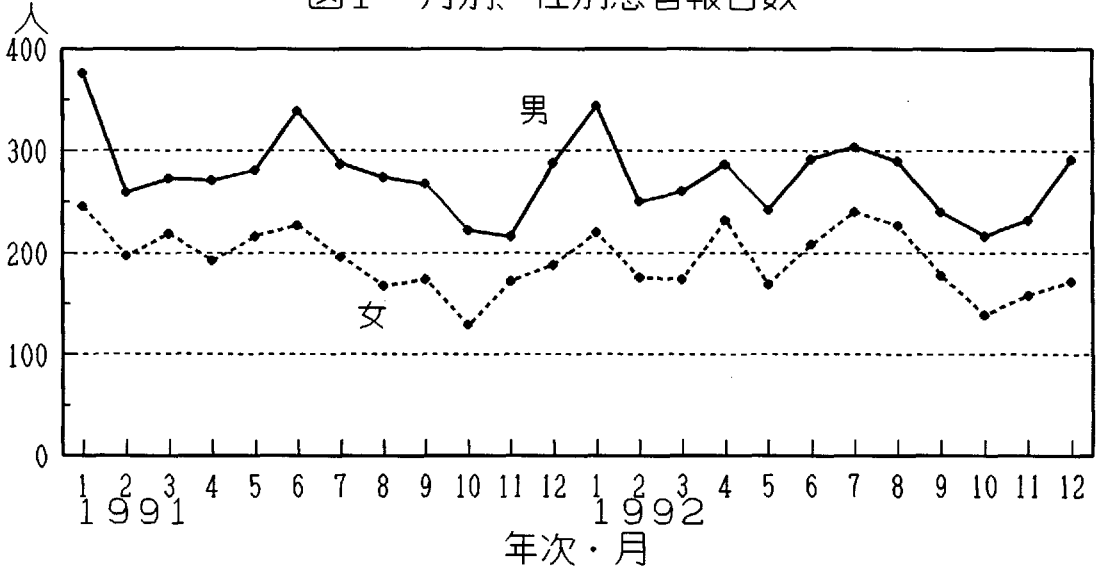


図2　性別、年齢別罹患率

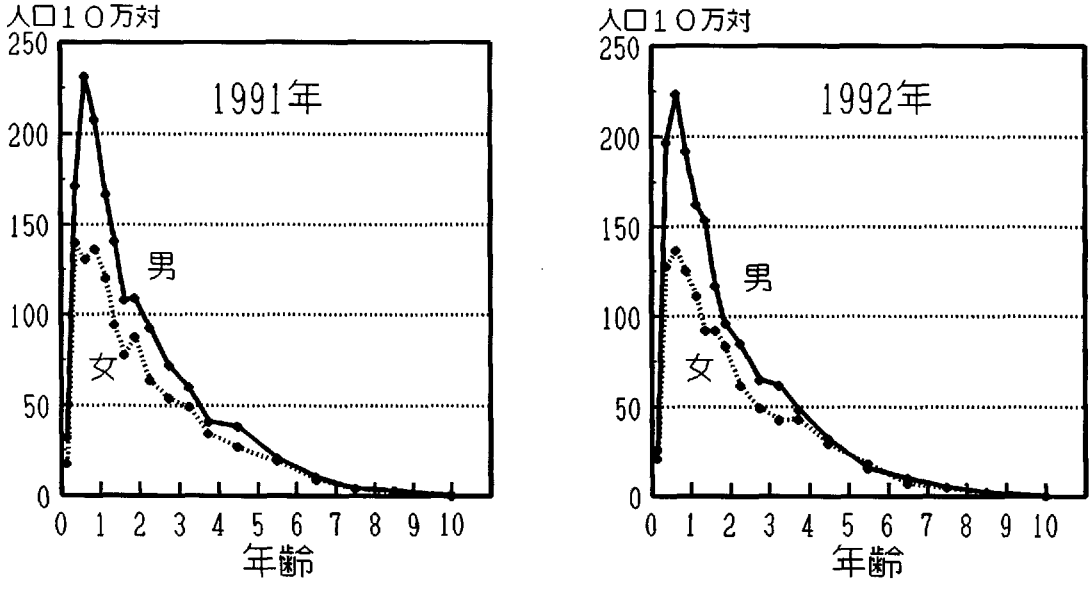


表1　性別、年齢別死亡例の割合

		総数	死亡者	%
総数		11,221	9	0.08
性別	男	6,604	7	0.10
	女	4,617	2	0.04
年齢別	～11カ月	3,227	4	0.12
	12～23カ月	2,869	2	0.07
	2歳以上	5,086	3	0.06
	不明	39	－	－

図3　性別、年齢別心後遺症の出現率

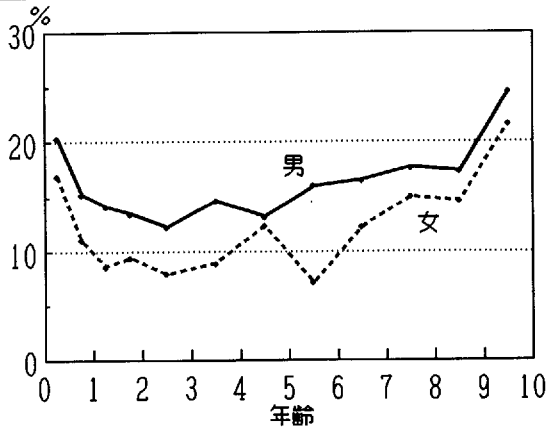


図4　性別、種類別心後遺症の出現率

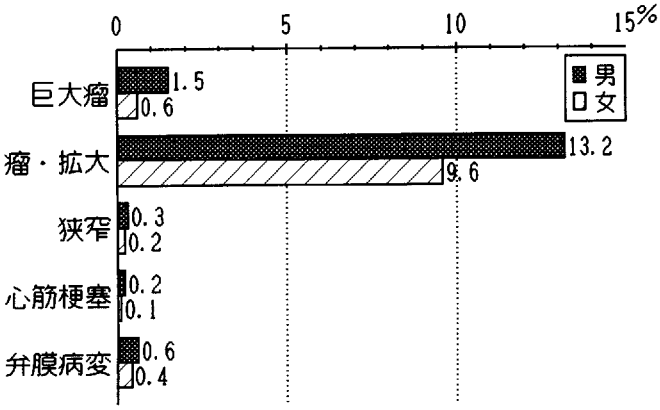


図5　年齢別、種類別心後遺症の出現率

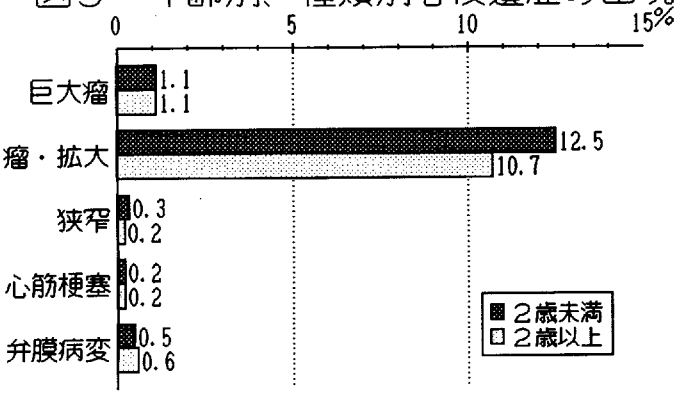
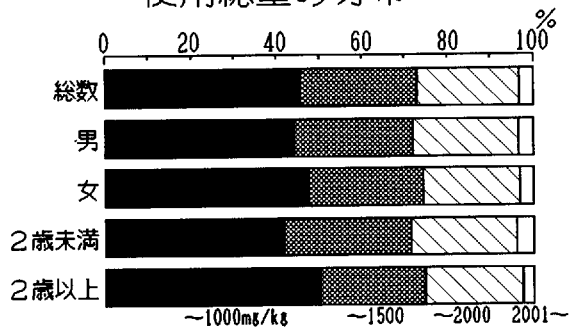


図6　性別、年齢別ガンマグロブリン使用総量の分布



ガンマグロブリン使用例8958名を集計
（量不明205名を除く）

図7　年齢別ガンマグロブリン投与開始日の分布

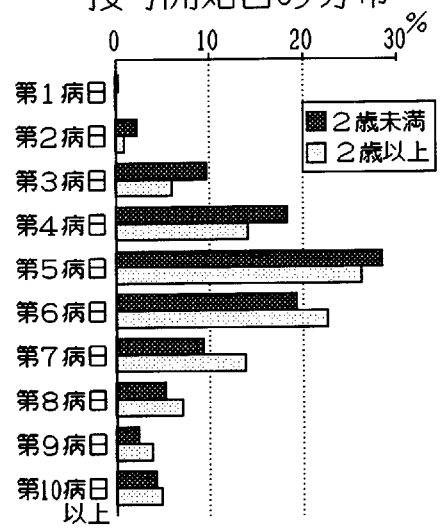


図8　診断別ガンマグロブリン投与開始日の分布

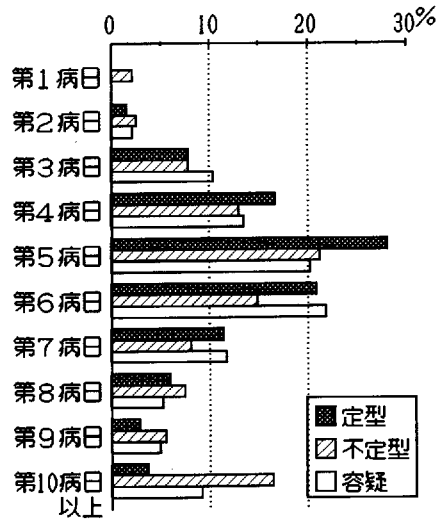


図7，8　ガンマグロブリン使用例8958名を集計
（開始日不明267名を除く）

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:厚生省川崎病研究班は、1970 年以来ほぼ 2 年に 1 回の間隔で 1992 年末までに、12 回にわたって全国の医療機関を受診した川崎病患者を対象に疫学調査を実施し、これまでに 116,848 名(男 67,815 人、女 49,033 人、男女比 1.4)の患者が報告された。今回 1991 年 1 月～1992 年 12 月末までの 2 年間における第 12 回全国調査の解析が終了し、患者数、性年齢分布、同胞例、再発例、心後遺症例、治療状況等の疫学特性を明らかにしたのでその概要を報告する。